
噬様

草月叶弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囁様

【Zコード】

Z8979X

【作者名】

草月叶弥

【あらすじ】

起きたら知らないところにいました。

カミサマ? なにそれ? ?

とりあえず子供たちが応援してくれるようなのでカミサマ業務、頑張ってみます。

初投稿なので拙い所も多々あると思いますがよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

ノリと勢いで書いた作品ですが、よろしくお願ひします。

プロローグ

あまりの騒がしさに私は閉じていた眼を開け、のそりと身体を起こした。

レーベンハーファーは、どうしてか?

何時ものように末の子供と遊んでやり、力尽きた子供と一緒に散歩に出るまでの間、うたた寝をしていたはずなのだが？

目の前には見たことのない子供たちが

「カミサマだー！」 「おつきいねえ！」

などと話している。

ん、これは夢だな。

こんな子供たちは見たこともないし、そもそも私はカリサマとやら
ではないし。

そう結論づけて、起こした身体を横たえると再び目を閉じた。

起きたら寝てた。

再び田を開けたら、先ほどとなにも変わっていなかつた。
くあ……とアクビをして辺りを見回すと少し田が傾いでいるので、どうやら夕方になつてゐるようだ。

夢のはずなのに何で起きても同じ場所なのだ?
なぜか騒いでいた子供たちも周りに寝てゐるし。

意味がわからないが、とりあえずこのまま寝かせておくわけにはいられないだろうと思つて、起こすこととに決めた。

決めたのはいいが、どうやって起こすの?

吠えるのは却下。(前にやつて怒られた)

では舐めるか。

舌を出して手近な子供の顔をペロッとな…………ん?

ペロッと舐めようと思つたら何だかやたらとぬにぬに舌が……しかも先つぽふたつに割れてるし。

そういえば子供たちも言葉が達者な割りに身体が小さくな。とは思つていたがどうこつことだ?

夢だからなのか?

考へても分からぬので、先に子供たちを起こすこととする。
自分では、ペロッ……のつもりが油断するとペロッ……になるのでやたらと氣を使うことになり、全員を起こした頃には妙な疲労感に襲われていた。

誰か説明してくれる人を求む。

起いされた子供たちはなぜか部屋の隅に固まってヒンヒンと話し合ひをしている。

やはり舐めて起こしたのがいけなかつたのだろうか？
でも昔、寝てる子供の近くで小さく吠えて起こしたら大泣きされた
上にこつぴどく叱られたので舐める以外の選択肢はほほなかつたの
だが……

それともペロッ…を失敗してペロッ…になつた子がいたのがいけなかつたのだろうか？

とりあえず子供たちが静かにしてる間に自分の身体を確認してみる。
先ほど氣付いた舌はやはり記憶よりも長く、先っぽは一つに割れて
いる。

その舌で歯列をなぞると鋭い牙が上下一本づつ、計四本あった。そ
の他の牙も何だかやたらととがつているようだ。

前肢はどうなつているのかと視線を向けると、毛の色が違つた。
銀色だつた。

しかも狼などのくすんだ銀色と違ひ、きらきらのピカピカだ。自己
主張が激しいにもほどがある。

ぐぐぐ…と身体を丸めて後ろを見ると身体も全部同じ色だつた。尾
は三本あつたが。

あ、前肢は普通だつた。サイズが前の倍以上あるようだつたが。あ
と、爪が出し入れ可能だつたが。

これ以上は自力で確認するのは無理だつたため、諦めて先ほどと同じように寝そべると、子供たちがこちらをじつと見つめていた。
相談は終つたのだろうか？

起き上がろうとしたら、ビクッ…と怯えられたため、寝そべつたま
ま怖くないことをアピールするために優しく

「怖くないぞ」

……………んん！？

今、喋らなかつたか！？

優しく「わうん」と呟えるつもりだったんだが…？
子供たちもびっくりして固まつてこる。

泣きそうな子までいる。

泣かれると面倒だし、怖くないことを分かつてもうわないとこかな
いのでもう一度やれしく…

「怖がるな」

「…なんで「わうん」じゃなくて「怖がるな」になるんだ…声も
嗄れてるし、余計に怖がらせているじゃないか…！」

びついたら良このが分からず悶々としていると、比較的身体の大きな子供がおずおずと声をかけてきた。

「あのう…カミサマ…ですよね？」

「……………？」

カミサマ？何だそれは…？

聞き返したいが、多分出るのは嗄れた声なので、首をかしげてみる。
疑問は通じたようすで子供たちは笛で一斉に喋りはじめた。

「僕たちカミサマで出てきてほしくて一生懸命祈ったんです…！」

「カミサマならヒーローやヒーローになつねばせんやヒーローを助けられると想つて…」

「だからカミサマ…」

「助けてください！おねがいします！！」

「おねがいします……」

お願いされてしまつた……

それはいいのだが、ここはどこで何でこんなとこにこんな身体でいるのか誰か説明してくれる人を求む。

切実に。

誰か説明してくれる人を求む。（後書き）

「ご意見、ご感想お待ちしていますー誤字、脱字等あつたら教えてください！」

スリーブの位置を10°（傾斜）

このままで押口更新でいいのかなあ？

心のなるじとせいか。

さて、お願ひされたのはいいが事態を全く把握できていない。

喋れば泣かれるかもしない。

だが、喋らなければ何もわからない。

子供に泣かれるのは本当に嫌いなんだがな……仕方がない。

頭を下げたままチラチラとこちらを伺つてくる子供たちが泣かないように祈りながら、話しかける。

「顔を上げなさい。」

やさしく言つたつもりだが、やはり嗄れ声と身体の大きさで怖がられてしまつたようだ。

一番小さな子供が震えながら大きな子の陰に隠れてしまつた。他の子達も震えてはいるが再度促すとゆっくりと顔を上げた。

うん、何て言つたか、美形ばつか。

やたらとかわいい子が多い気がする。

男の子三人と女の子の二人の総勢5人。

人間の年齢は分からないが、まだ親の庇護下にいるべき年齢だろう。一番はじめに話しかけてきた男の子がリーダーだろうか？ 身体も一番大きいし。

「そこ」の少年。お前がリーダーか？

「…つ！？はいっ！？」

突然話しかけられて驚きながらもしっかりと答える。
これなら話しさはできそうだな。

「お前はこの状況が説明できるか?」

「…………」

「できないのならば、できる人間を連れてきなさい。」

「…………」

沈黙されてしまった。

難しいことを言つたつもりは無いのだが、やたらと悲壮感が漂つて
いるのは何故なのだろうか?

何だか嫌な予感がするので、それを打ち消すべく話を続ける。

「何故答えない。」

「そ……れは……」

「…………説明できる人間がいないのか?」

そう、それが一番怖い。

だがそれは「そんなことないよ!」と、即座に否定された。

「ならば、何故?」

問い合わせば「うう……」と唸つて、そわそわとよそ見をし始めた。他の子達も何だかそわそわしている。

その様子を見ながら、今の話をまとめてみると

・子供たちにはこの状況を説明できない。

・大人には説明できる人間がいる。

・子供たちはなぜか大人には知られたくないようだ。

簡単だった。

「お前たち、大人には秘密でここにきたな？」

「…………！？ なんで！？」

何で分かつたのかと聞きたいのだろうか？態度でバレバレなのだが……。

とにかく自分の状況を把握するためにも子供たちには犠牲になつてもらつしかない。

言いつけを守らなかつた子供にはお仕置きが必要だらう。

「家に戻つて、大人に説明してきなさい。」

そして誰か説明ができる人間を連れておいで。」

私の言葉に子供たちには泣きそつになる。

「泣かなくともいい。」

「ただ、今日はもう遅い。連れてくるのは明日にしなさい。
わかつたね？」

につこり笑うと、子供たちは目に涙を浮かべながら「ぐぐく」と頷いたあと、手を繋いでしょんぼりと帰つていつた。

何はどうあれ、一步前進だ。

初めて人の言葉を喋つて予想以上に疲れだし、お腹もすいた。だがここには食べれるようなものは何もない。

建物の周りを一周すると水が入つた入れ物があつたのでそれで喉を潤し、元の場所に戻つて寝そべると、私なりにこの状況について考えることにした。

おじさんじゅうせん（後輩や）

誤字・脱字等あつたら教えてください。感想てくれるとなつて喜びます（笑）

思考（前書き）

少しシリアス気味です。

思考

まず最初に不思議なのは何故喋れるかとこいつことだ。

私は喋つた事などない。

人が話す言葉を多少理解する」ことはできたが、自ら喋る事など出来なかつた。

そこまで考えて新たな疑問が出てきた。

何でこんなことを考へる」とがでゐる?

私の思考はこゝれほど複雑では無かつたはずだ。そもそも考へるということをあまりしたことがない。

寝て、起きて、食事をして、家族と過ごす。

教えられたことをこゝなし、言ことつけを守る。

そんな簡単な日々だつたはずだ。

何がおかしい。

いや、全てがおかしい。

そもそも何故、私はこゝにこゝののか

夢だと思っていた。だから寝て、起きれば良いと思つていた。

なのに起きたら子供たちと一緒に寝ていたことに驚いて忘れていた。

「こなじみのだらう?

家族はどうしているのだらう?

そう考えて私はハツとした。

家族、そう、家族だ。何故忘れていたのか。
優しい父と怒ると少し怖いがご飯をくれる母。毎日ダイエットだと
言つて散歩に連れてていってくれた姉に年の離れた末の子供。
昼寝から起きたら一緒に遊ぼうと言つていた末の子供は泣いていな
いだらうか。

心配性な所がある母は……優しいが躊躇には厳しい父は……樂観的で、で
も悲しいことがあると私の身体に顔を埋めてくる姉は……き
つと眞、心配している。

こんなに悲しく切なくなつても、私はその気持ちを表すために吠え
ることもできない。

だが家族のことを思えば思つほど、私の中に言い様の無い気持ちが
溢れてきて吠える真似事でもすれば少しは気が晴れるのではないか
と思い、実行することにした。

「わあん……おおおおおん」

少し試してみると、何だか出来そうな気がした。

「オオオオオオオ……ワオオオオオオオ……」

薄暗い建物の中で、私の声が木霊する。
少し気を良くした私は、外に出て月を見上げる。

ワオオオオオオオオオオン

私は口にいる。心配しなくても元氣にしている。
会いたい。悲しい。

思いを込めた遠吠えは森の中に響き渡り……消えた。
半分に欠けた月を見つめながら、私はゆっくりと眠りに落ちていった。

思考（後書き）

ストックが尽きましたので、更新が不定期になる可能性があります。
ご意見、ご感想お待ちしています。

村の入り口につく頃には口はほとんど落ちていて、そこに大人たちが集まっていた。

それに気付いた子供たちは思わず足を止める。すると、大人たちの中から一人の女性が子供たちに気付き走りよってきた。

「コーナー！」

「…おかあさん…えつと…」

「…んなに暗くなるまで何してたのーお母さんは心配で心配で…もう少ししても帰つてこなかつたら暗で探しにいこうと思つてたのよー！」

女性は一番小さな女の子をぎゅうつひとつ抱きしめポロポロと涙をこぼす。

「…めんね。あのね、かみさまのところにおこのつこいつてたの。」

「…幽様のところに？」

「うん。おにこちゃんをおしつべださーつて」

一生懸命話すコーナーを母親はさりにきつづだきしめた。

「…幽様の所だと？」

コーナー達の話を聞いて、一人の男が近づいてきた。

緋色の髪を短く刈りあげ、その体は鍛え抜かれている。

周囲の男たちと違つて少し背が低いが、そんなことを感じさせないくらい堂々とした雰囲気をまとっていた。

少女は見すえられて怯えたのか、母親の陰に隠れてしまった。
そんな少女に目尻を少し緩ませ微笑みかけると、村長は一番大きな
男の子に話しかけた。

「どうじゅうじとだ? ライ。」

声をかけられた男の子は一瞬つむぐと、意を決したように顔を上げた。

「疫病を治してもらひにカミサマのところにお祈りにいったんだ。
そしたら、ちょっと…いろいろあって…こんな時間になつちゃつ
た。

心配かけて「めんなさい。詳しく述べ家に帰つてからでもいいかな
? みんな疲れてるし…」

「ふむ…ここではできない話か。分かつた。」

「じめんなさい…」

「無事ならいい。」

「おい! 皆! 子供達も無事に帰つてきたことだし、今日はもう遅
い。話は私がライから聞いておくから皆は解散して家に帰つてくれ
! ! !」

村長の言葉に、村人たちが訝しげにしながらも家に帰つて行つた。
他の子供達も親元に戻り、怒られながら帰つてゆく。
ライも村長である父親に連れられ、家に向かつた。

「で、どうじゅうじとかしつかり説明してもらおうか?」

開口一番そう言つた父親の瞳は威圧するような言葉とは裏腹に楽し気だった。

彼は今では村長として皆を取りまとめるため堂々として厳しい様子をみせているが、本性はいたずら好きの人の嫌がることを嫌われない程度にして楽しむ性格のゆがんだ人物である…とライは思つている。

そして今は子供たちが何をしでかしたのか、気になつて仕方がないんだろうな…でもそれを全面的に出すのは何か悔しいから厳しいフリをしてるんだろうな…と感じていた。まさにその通りである。

「ほり、早く話せ。」

「い…けど…怒らない?」

「ま、それは場合によるな。まあ俺の予想した通りなら遅くなつたこと以外に怒る必要はないけどな。」

だから早く話せ。」

「うん、実は…」

ライの話は簡単だったが長かった。

疫病が蔓延し、子供達も不安な日々を送つていた。そして、ユーナの父親が疫病に感染した。

どんな薬も効かないのは今までで十分わかっている。でも悲しい顔をしたユーナの気持ちを少しでも軽くするため、ライ達はカミサマの祠にいつてお願いをすることにした。

ただお願いするだけではダメだと聞いていたので、めいめい自分の宝物（一番きれいなリボンやらきれいな石やら蛇の抜け殻やら色々だ）をもつて祠に行くと、一生懸命お願いをした。

いつまでそうしていただろうか。辺りがピカッと光つたと思つたら祠の中で「じそ」そと何かが動いている気配がしたので中をのぞいた

らカミサマがこっちを見ていたのでそつと近づくと、カミサマはこちらに興味がなかつたようで寝てしまった。だから起きたらお願ひしよう。祠の中で座つて待つていたらいつの間にか自分たちも寝てしまった。

そこまで話して、ライは乾いた喉を潤すために水を一口飲んだ。そのまま父親をうかがうと続きを話せ。と無言で催促されたので、続きたことにした。

「それで、寝てたらカミサマに舐めて起こされ、コーナが泣きそうになつて大変だつたんだけどなんとかなだめてカミサマに助けてください! つてお願いしたんだ。そしたらなんだか困つた顔をして、とりあえずなんでこんなことになつたのか説明できる大人を連れてきなさいつて。それと、今日はもう遅いから帰つて明日きなさいつて言われた。」

「・・・・・・・・」

「あの…父さん?」

「よし、分かつた。俺はちょっと巫女と話していくからお前は寝てろ。」

「え? でも…」

「後は父さんが何とかする。囁様にも明日、ちゃんと話して行ってくる。」

お前たちがやつたことが良いか悪いかは今後、どうなるかによるから何とも言えないからとりあえず今は保留な。」

「…つん…」

「じゃ、俺は言つてくるから…寝とくんだぞ…」

「…」

父親はライの頭をぐしゃぐしゃとかき回すと、巫女の家に行つてしまつた。

一人取り残されたライはああつた父親は一通り筋が通らないと説

明してくれないと分かっているので諦めて寝る準備をしたのだった。

sideN供（後書き）

ちょっと間があいてしまいました。帰った子供たちの話です。
ここから話が進む。。。ハズ？

少し長めですがほぼ、会話文です。

巫女の家にたどり着いた村長はノックもせずに室内に入った。

「邪魔するぜー。」

「ラウジーいきなりなんなの?」

「ライから話を聞いてな。相談しにきた。ソフィアじゃなく巫女にな。」

軽く言われた言葉にソフィアは居住まいを正す。

昔からの仲間たちの前ではいつもおちゃらけているラウジがいつ言うときには何か深刻な問題があるからだ。

「何があつたのですか?」

「噺様に関する」とだ。あいつらどうやったかは分からんが噺様を召喚したらしー。」

「...まあええ?！」

ソフィアはラウジの台詞にすっとんきょうな声をあげると固まつた。

「だよなー。びっくりするよなー。俺も顔には出でなこいつにしたけどびびったもんなー。」

分かる分かると頷くラウジ。

「…………って、ちょっとまつて！それは本当なの！？」

「多分本当だぜ？いきなり祠が光つたら見たこともない獣がいたらしいし。」

体毛は銀色に輝き鋭い牙と、三本の尾を持つた狼のような動物な

んでこの辺りには居ないしな。人語も話してたらしくし噛様で間違いないだろうよ。」

「それが本当なら…喜ばしいことかもしれないけれど、問題があるわよ?」「

「ああ、だからお前に話をしにきたんだ。噛様の巫女であるお前は村長である俺よりも噛様について詳しいだろ?」

「そうね…貴方は村長だから噛様の力が一つあることは知っているのよね?」

「ああ。でも詳しいことは知らないぜ。」

「では、その力についてと噛様とは何なのかについて話をしましょうか。」

「噛様とは銀色に輝く体毛と何もかもを噛み碎く鋭い牙と全てのものを癒す先が二つに別れた長い舌と三本の尾を持つたもので、大抵は狼のような外見をもっていることが多いわ。

でも今までの噛様の中には狼とは違うものの形をとられた方もいらっしゃったと記録には残ってる。そして人語を操る事ができる。ここまででは村の人たちも知っていることね。おとぎ話にもなってるし。

そしてここからは巫女にだけ伝えられているのだけれど、噛様はこの世界の方ではないわ。おとぎ話のように神の世界から来られた訳でもない。

「噛様はね、異世界から来られるのよ。」

「異世界？」

「そう。 噛様は別の世界で生きていた普通の動物か人がこちらの世界の人間によつて召喚されてこちらの世界にくるの。 大抵は動物が多いよ。 そしてこちらの世界にくると力を『えられる。 それが

『 噎様。』

「ちよつとまで！ それじゃあ『 噎様』つてのは俺らと何も変わらないんじゃないか？」

ラウジの疑問にソフィアは続きを話すことで答える。

「 そうでもないわ。 さつき話した通り『 噎様』には何もかもを『 噎み碎く』 牙と全てのものを癒す舌を持つている。 これが『 噎様』が持つていると いう一つの力の事よ。

ただし、これには大きな問題があつて『 噎様』たちはこの力のどちらかしか操れない。 牙を持っている形で現れたからといってその牙を使いこなせられる訳ではないってことね。 それは舌も同じ。 たまに一つとも使える方も居たみたいだけど片方に特化していくもう片方は微妙だったみたいよ。 そして使えるようになるまで時間がかかることが多い。

力がどちらに傾いているかは会えばすぐに分かるから問題は無いわ。

ライの話から今回の『 噎様』は理性的な方みたいだし、話し合い自体は比較的穏やかに行えると思う。

ただね、これだけは肝に命じておいて欲しいのだけど、もし、『 噎様』が私たちに力を貸して下さらなくとも『 噎様』を害してはいけないわ。 さつきも言った通り『 噎様』は異世界の方。 こちらの都合で呼び出した上に意に沿わないからという理由で『 噎様』に攻撃を行うと、今後、何があつても『 噎様』を召喚できなくなってしまうわ。 そして、私たちは『 噎様』を失う。 記憶からも消されるらしいわよ。」

話を終えて、ソフィアはゆっくりとため息をついた。

「とにかく、今回召喚された嚙様が癒しの力を持つてることを祈るばかりね。嚙様の癒しの力はどんな病気や怪我もなおしてしまわるらしいから。」

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「ラウジ？」

眉をしかめて黙りこんでしまったラウジにソフィアはやっと声をかける。

「……………」

「ー..?..ラウジ?..ー..」

長い話に飽きたのかラウジは居眠りをしていた。

一瞬でキレたソフィアが殴り倒して起こうとする遠くから「オオオオオオオン」ともの悲しい獣の鳴き声が響いてきてソフィアは振り上げた手を下ろしてしまった。

森の獣にあのような遠吠えをするものはいない。
ならば今のは嚙様だろう。

家族と離され知らない身体を連れられ、どれほど悲しいだろうか。
遠吠えを聞きながら、ソフィアは何があつても嚙様の力にならひつ..
と心に決めた。

余談だが、その後やはり殴つて起こされたラウジは正座で一時間説

教を受けることになった。

嘔様の設定をソフィアに説明させてみました。会話文での説明つて
難しい……

何かできたよ。

日の光が眩しくて私は日を覚ました。

昨夜はあのまま眠つてしまつていたようだ。

場所は昨日と同じ。身体も検分してみたが、昨日と変わらないようだ。

もう一度寝ようかとも思つたが日がさえてしまつた為に眠れそうにはないし、さてどうするか。と思つたところで『ぐるぐるるる』と腹の虫が鳴つた。そういうえば昨日こちらに来てから水しか飲んでいない。

何か食べるものでも探しにこいつかと立ち上がつたといひで何だか変な感じがした。

痒いといひに手が届かないというか、なんだかもぞもぞするというか、どう言つたら良いのか分からないので『変な感じ』としか言いようがない。

何やら集中すれば良いような気がしたのでそのむずむずに意識を向けてみると、目の前にぼんやりと人影が見えた。

ビックリして意識を外すと見えなくなる。

また意識を向けるとやはりぼんやりとだが人影が見えた。そのまま集中するとだんだん人影がハツキリしてくる。

男と…昨日の子供……と、何だかやたらとキラッキラな女の、三

人だ。

大人を連れた子供が居るということは説明しにきたのだろうが、あの女は何故、あんなにキラッキラなのだろうか。他の二人は何となく顔形が見えるのに全く見ることができない。

多分こちらに向かつているようだし、直接見る分には大丈夫だろうと何となく思つて意識を閉じる。

それにしても、腹が減つた。

人が来るなら食料を探しに行くこともできない。

こちらに向かっているのだろう人間達が何が持つてきてくれていることを願うばかりだ……

私はくるくると鳴る腹を宥めながら待っている。
待ちきれなくて建物の外に居るのは許してほしい。

しかし昨日は暗かつたからよく見えなかつたが、この建物、内装は木で出来ていて外側は石造りなんだな。しかも柱の一本一本まで細かい装飾が施されている。多分ここは人間にとつて大切な所なのだと思う。

そんなことをつらつらと考えていると、目の前の茂みがガサツとなつた。

ようやく人間がたどりついたようだ。

さあ、ご飯をくれ。

何かできたよ。（後書き）

今回短めです。

ちょっと悪くなりそうだったのでここで一旦切れます。
まあ予定は未定ですけとなつ！

やつて来たのは予想通り男と女と子供の三人だつた。直接見た女は先程とは違つて光輝いておらず少しホッとする。

「カミサマー約束通り大人を連れてきました!」

子供が走つてきて報告をしてくれた。

うむ。良い子だ。

褒めるつもりで舌を出して舐めようとしたら怯えた顔をしたので止めて頷くだけにとどめておいた。

改めて果然としているに向き直るととどりあえず挨拶をする。

「はじめまして。」

「……はじめまして。貴方が囁様か?」

男の方からだけ返事がきた。しかも疑問つきで。女の方は何故か顔を赤くしてこちらを凝視している。ちょっと怖い。

そうそう、質問に答えるのを忘れていた。私が”カミサマ”とやらかどうかだったか…

「知らないな。」

「知らない?自分のことだらう?」

「気づいたらここにいて子供たちが騒いでいた。私は何故、自分がここに居るのか理解できていない。」

そもそも私はその子供にどうしてこんなことになつてているのか説明できる人間を連れてきなさい。と言つたはずだ。

お前はそれを聞いて来たのではないのか?」

私の言葉に男は黙りこむ。

ふと前足を触られた感触がしたので田をやると、顔を真っ赤にした女が私の毛をすいていた。

「ふさふさ……キレイ……」

「え？ なんだ？？」

思わずほんやりとみると女はつりつりとした表情で私の毛並みに顔をうずめた。

「柔らかくてわいわいで、でも暖かくてとても気持ちいい……毛足が長いからもふつとできるし。あんなて素晴らしいのかしらー。」

「何だるう」の女は。

男に助けを求めるよつとするが、さつと田をそらされた。では、子供は……と思うと先程までの場所にはおらず、少し離れた木立の中からこちらを見ていた。助けてくれる気はなさそうだ。

「……うおんっ」

なで回されるのに辟易した私は少し威嚇を込めて小さく吠える。すると女はハッと顔を起こすと、呆れを通り越してこちらが困つていてのを助けもせずニヤニヤしている男、木立の中からこちらを伺っている子供、そして最後に私を見て慌てて身体を離すと（かなり名残惜しそうだったが）こちらに向かうと深々と頭を下げた。

「お見苦しい所をお見せして申し訳ありませんでした。

私は巫女のソフィアと申します。

「」のような事態になつた説明は私からさせたいだけますのでよろしくお願ひいたします。」

「わ……分かった。よろしく頼む。」

顔を上げた女は先程までの様子が嘘のように凛としている。あまりのギャップに私が少し引いたとしてもそれは仕方のないことだらう。

「それでは早速説明をさせていただきたいのですが、よろしくですか？」

「ああ……いや、その前に何か食べ物を持つていなか？ 昨日から何も食べていないので腹が減った。」

「食べ物……ですか？ 私は持っていないのですが……ラウジは？」

「一応、干し肉なら持っているが……これでもかまわないでしちゃうか？」

そつと男が持っていた袋から取り出したのは拳程の肉の塊だった。

すでに限界だつた私は答えるのも面倒で差し出された干し肉を無言で奪い取ると前足で押さえつけ端からガリガリと削り取つては飲み込んでいった。正直一口で食べられたのだがそれではすぐになくなつてしまつのでこんな面倒な食べ方をしたのだ。それでも食べきるのにさほど時間はかからなかつた。

「「」馳走さまでした。」

お腹一杯にはほど遠いが、とりあえず空腹では無くなつた。それでも名残惜しくて押えていた前足を舐めていると皿の前に水の入つた椀が置かれた。顔をあげると女……ソフィアが「一口一口しながら」「お飲みください」と言つので遠慮なく飲むことにする。

「ありがとう。少し落ち着いた。」

「いいえ。私たちも嚙様がお腹を空かせていらっしゃるのも考えていいなくて申し訳ありませんでした。

落ち着かれたようでお話をさせていただいてもよろしいですか

？」

「ああ。頼む。」

そうしてソフィアが語ったのは昨夜ラウジに語ったのと同じ。
嚙様がこの世界に召喚されたこと。この世界に来たときに姿が変わつてしまつこと。そして嚙様には一種類の力があつてどちらかしか操れないということ。

そして、嚙様として召喚されたものが元の世界に帰れるかどうかは分からぬということ。

「分からぬ……何故、分からぬのだ？」

「嚙様についての伝承は多種多様にあります、なぜか最後があやふやなのです。巫女の口伝でさえ伝えられてはおりません。私も調べてみたことがありますが何もわかりませんでした。」

「そうか……帰れないのか……」

「申し訳ありません。」

「いや、貴女が謝ることはない。」

そう言いながらも私の心は家族を思つて張り裂けそうだった。

帰れない。

もう、会えない。

悲しくて悲しくて前足の間に顔を埋めてしまつ。つこでに尻尾も丸めて丸くなる。

三人がびっくりしたように息を飲むのが分かったが、自分の感情に翻弄されていた私は他人のことなど気にしている余裕は無かつたので放置しておいた。

どのくらいそのまでいたのだろう。

気がつけば周りに人影はなく、建物の外にはかごに入った果物と干し肉が置いてあった。

持っていた分は食べてしまったはずだから、これは新しく持つてくれたものだろう。

どれだけ悲しくとも腹は減る。

ぐう。ど主張する腹に負けて私は果物と干し肉を食べた。

それがとても美味しくて、一心不乱に食べ続ける。

全て食べ終わると一日ぶりの満腹感が襲ってき、ついでに睡魔までやってきた。

うつらうつらしながら、

最後まで話を聞いてなかつたのは悪かつたな。明日はちゃんと聞こう。助けてほしいと言われた内容もきいていないし……

そこまで思つたところで私は意識を手放して睡魔に身を委ねた

田舎（後書き）

ソフィアさんのもふもふリポートをもつと書きたかったんですが長くなりすぎるので短くしました。
機会があれば書きたいです。

一人の話

「で、どうするんだ？」

「どうして？」

「ラウジの言葉にソフィアは首をかしげる。

「噛様のことだ。あのまま置いてしまったし。一応、食料は置いてきたが……」

「そうね……あそこにおいてもビーフシチューもなかつたしね……」

ふう……と小さくため息をついたソフィアの脳裏には別れた時の噛様の姿が写っていた。

悲しみを全身で現し何もかもを拒絶するように丸まってしまった噛様に声をかけることもできず、だからといって放置することもできず、そこにいた三人にできたのは一旦村に帰り気がついた噛様が食べれるように食料を置いおくことだけだった。

「明日、もう一度行つてみましょ。どうせ食料も持つていかなければならぬのだし。」

「そうだな。それはそうと、今代の噛様の力はどうやらだつたんだ

？

「…………え？ 分からないわよ？」

きょとんとするソフィアに驚愕するラウジ。

「何でだよ！ お前、あんなけなで回してたじやねえか！ ！ 調べるのは簡単だつつてたから噛様の助けて欲しそうな視線も無視つてたのに……」

「えつと…」「めんなさい？」

あれは単純に噛様の毛並みがあまりにもキレイでふわふわしていから欲望が押さえきれなくって……ちょっとだけと思って触つてみたら予想以上にふかふかのさらさらで毛玉なんて一個もないのよ！？撫でるしかないわよあれは…！」

感触を思い出したのか頬を染め蕩けるような表情で噛様の毛並みがどれほど素晴らしいのか力説するソフィア。

「わーかった！分かったから落ち着け！…」

「そう、あれこそが世界一の毛並みなのよ…」…ハツ！？私は何を…？」

「…………覚えてねえのかよ…………」

「ええと…覚えてるわ…よ？噛様の素晴らしいせにひついて語つていたのよね？」

「もういいから…力の調べ方について話してくれ。」

げんなりした表情のラウジはそここやこいつ異常に毛のある動物が好きだったな…と今更ながらに思いつつもつ一つとソフィアに動物の毛並みについては話をふらないでおじつと心に誓つ。

「力の調べ方はね、とても簡単なの。」

「それは昨日も聞いた。具体的にはなにをするんだ？」「…」

「甘噛みしてもらつの。」

「甘…噛み？それは何だ？」

「牙のある動物の一部はね生まれた子供が小さくときに口でくわえて移動させる。その鋭い牙で子供を傷付けることなくね。それが甘噛み。と呼ばれるものよ。」

癒しの力を持つ噛み様は必ずこれを行つことができる。たとえ召喚されたその日であつてもね。だから甘噛みして下さい。つて頼ん

で悩むことなく出来たら癒しの力を持つていて、できなかつたり悩んだりした場合は攻撃の力を持っているということになるわ。」「それだけか？」

「そうよ。噛様が何で『噛様』って書くと想つてゐるの？噛むことで力が発揮されるからよ。癒しの力を使うときには噛んで傷付けてしまつたら意味がないでしょ。」

「それもそうだな……」

「とにかく、その確認は明日することにしましよう。それと子供たちから噛様が現れたつてことは村に広まつてしまつているから貴方は皆に過度な期待を持たないよう話をしておいてね。あと、勝手に祠に行かないように。つて。」

「了解。じゃあ俺は男どもを集めてむさ苦しい会議してくるわ。」

面倒臭そうな声と共に出ていってラウジを見送つて、ソフィアはため息をついた。

明日になれば噛様は落ち着いてくれているだろうか？

癒しの力を持つていたとして、それがすぐに使えるようにならないうことをソフィアは知つてゐる。多分、今の時点で病に侵される人々が助かる可能性は低いだろう。だからといって諦めることはできない。

ソフィアにできることは巫女として噛様を導くことだけなのだから

一人の話（後書き）

ソフィアは天然入ってるようですね。

翌日。

前日と同じように日の光を浴びて目を覚ました私は水を飲みながら空腹を堪えていた。昨日、人間たちが持つてくれていた食べ物は食べきってしまったためだ。

少し残しておけば良かつたと公開したが後の祭り、そもそも昨日は丸一日近く何も食べていなかつたため限界だったのだ。今は空腹ではあるが昨日のように切羽詰まつた感じではないので耐えるのも比較的楽である。運が良ければ昨日の人間たちが何か持つてくれるだろ? といつものある。

ちなみに帰れないことに關しては寝て起きたら

“それならそれで仕方がないな”

と思うようになつていた。

家族に会えないのは悲しいし寂しいが、だからといってうじうじ悩んでいても何も変わるものではない。ならばこの召喚されたとかいう世界で生きていこうことにしよう。

元々、悩むことに慣れてなどいない私はそう結論づけたのだった。

だらだらしているうちに日は完全に昇り、暖かな光が辺り一面に降り注いでいる。

私は昨日の良く分からぬ力を試すべく、広場に立つて森を睨み付けた。

何も感じない……いや、何だかもやつとした感覚はあるのだが弱いし感じては消えていくので特定が難しい。昨日はこっちに

集中すればいい。となぜか分かっていたので問題なかつたのが……

と、突然もやつ。がむすむずに変わつた。しかも続いている。どうやら小道の先から感じじるよくなので集中してみると昨日の男と眩しい発光体（多分女）が見えた。

袋のような物を持っているよくなのできつと食べ物を持ってくれたのだろうと思い、その場に寝そべつて待つことにした。

待つこと数分。

広場にやつてきた二人と挨拶を交わしてから食べ物を貰つて、食べ終わると昨日の話の続きである。

「助けて欲しい。

子供たちはそつ言つていたが、私に助けることなど出来るのだろうか？昨日の話では力は一つしか持てないと言つていただろう？

「はい。そこで嘔様にお願いがあります。」

「願い？」と首をかしげるとソフィアはとても良い笑顔で言つた。

「このラウジを甘噛してください。」

「うん！？俺！？」

どうやら寝耳に水だつたらしこラウジがやたら驚いているがソフィアはそれを無視して「さあどうぞ」と促してくる。

私はそれくらいならとおずおずと出されたラウジの腕を牙で傷付かなくようこそつとくわえた。

「…やつた！…」

固唾を飲んで私がくわえるのを見つめていた一人は私が腕を離すと喝采を上げた。

「これで…村が救われる……」

「噛様噛様。これだ噛様は癒しの力を持つてることがわかりました。あとは力の使い方を覚えるだけですので簡単です。よろしくお願ひしますね！…」

舞い上がりつて話す二人の話をまとめる、村は疫病が広がりつつあって、私ならばそれを癒す事ができるらしい。

困つてるもの助けることに異論は無いが、本当にそんな力があるのだろうか？

私の葛藤などお構い無しにソフィアは食べ物が入っていた袋を開けると小さなナイフを取りだし、止める間もなくラウジの指先に小さな傷をつけた。

「…いつてえ！お前何すんだよ…」

「ラウジは黙つて！」

さあ噛様。ラウジの指をくわえて舌で傷に触れてください。傷が治るように優しく舐めるといこうとしてですよ。」「

にこやかなソフィアには拒否することを許さない雰囲気がでている。私はゆっくりと差し出された指先をくわえ『治れ～治れ～』と思いながら舌で傷口に浮かんだ血液を舐め取った。

鉄臭い味に思わず口を離すと、ラウジが自分の指先をマジマジと見ている。

失敗したかと思つて内心で焦つていると、

「治つてゐる」

ところづきが聞こえた。どうやら成功したよつてホツとする。

このあと日がくれるまで力の使い方の練習と講義が行われ、二人は夕食用の食べ物を置いていくと明日もまた来ると言つて去つていった。

練習台にされ続けたラウジの背中からは濃い哀愁が漂つており、ご機嫌のソフィアと比べるととても可哀想だったので、視線で『頑張れ』と応援しておいた。

声には出さなかつた。じぱつちりを受けたくはなかつたので。

慣れない身体での甘噛みの連続は思つた以上に緊張していらしかった。祠の中の定位置に寝そべると、あつといつ間に眠つてしまつた。

ちから（後書き）

囁様の力決定。

今週は予定外の仕事が増えてしまい更新が遅くなりました。すみません。

病（前書き）

疫病についての説明です。病については現実にある病気を改変して使用します。

かなり変更は加えていますが、元の病気を知っているかたには分かってしまうと思います。すみません。

村には疫病が蔓延していた。

初めて死んだのは老人だった。

突然の発熱。数日続いたそれが下がった次の日の朝、老人は立つことが出来なくなっていた。次の日は目が見えなくなり、その次の日は腕が上がらなくなり、次の日には口が聞けなくなり、最後は心臓が止まつた。

死に方が不自然ではあつたが、老人が高齢だったこともあり、変な病にかかつたのだろうということで皆、納得していた。

念のため遺体は火葬し、発病してから老人に触れた人たちは念入りに手洗いを行つていた。

だが数日後。

若い男が発熱した。そして下がつた次の日の朝起きると腕が上がらなくなつていた。

彼は猟師だったので自分の身体にはとても詳しかつた。発熱前には大きな怪我をしたこともなければ変な虫に刺された覚えもない。このままでは生活できないので急いで薬師に相談しにいつたが、分からぬと言わてしまつた。

次の日、彼の口は動かなくなつていた。半狂乱で暴れる彼をむ村の男たちが取り押さえ、無理矢理寝かしつけた。

そして次の日、彼の心臓は止まつていた。

この時点で村人たちは何がおかしいと気付いた。

そして彼が死ぬ数日前に老人が似たような病で死んだことも思い出した。

だが彼と老人に接点はなかつた。何より老人が病に侵されている時、

彼は狩りに行つており村にいなかつたのだ。

数日後には若い娘が発病した。彼女は嫁入り直前だつた。

次の日には中年の女が。

ゆつくりと、だが確實に病は広がつていつた。

この病は突然の発熱から始まる。それは3日～5日程で下がるが、下がつた次の日の朝に身体の一部が動かなくなつていて、動かなくなる場所は人それぞれで指一本の場合もあれば両足など様々だ。ただし、最後は必ず心臓が止まる。

感染経路は不明。発病した人々の共通点もない。

ただ良いこともあつた。看病のお陰か最短でも3日は下がらなかつた熱が2日で下がつた者がいた。その者は次の日に身体が動かないということがなかつたのだ。

ただ、その者も何日が後には発症したが……その経過は緩やかで心臓が止まるまでに一月を要した。

その時点で他にも発熱がすぐに下がつた者が現れており、彼らも経過は緩やかだつたことから、熱が早く下がれば心臓が止まるまでも長くなることがわかつた。

ただこれも根本的な解決ではなく死を引き伸ばしているだけではあつたが……

そんな手詰まりの中、現れたのが

“ 噙様 ”

だ。

しかも“癒しの力”をもつた“噙様”だという。

嫌があうにも膨れ上がる皆の期待を抑えながらラウジは頭を抱えていた。

今は特に切羽詰まつて発症が進んでいるものはいないから力の使い方を覚えるまでに多少の時間がかかったところで問題はない。

問題はその後だ。

ラウジたちの村があるコリティシア王国では嚙様信仰は廃れている。その代わりに太陽神が神様として大々的に信仰されていた。廃れているとはいっても田舎の方では神様と嚙様は同じようにして奉られているので弾圧などは全くない。ただ、嚙様が召喚されたということが国にバレるとややこしいことになるのは確実だった。税を納めている関係で領主には病のことを話してあるのでイキナリ全員回復しました。というと絶対に理由を聞かれる。傾向と対策も絶対に聞かれる。

今の領主は穢やかな性格なので何とか言いつぐめて時間を稼ぐしかないだろう。

どれだけ考えても良案が出てこなかつたのでラウジはこの問題を一旦棚上げすることにした。

村人たちには箇口令を敷いているし、病のせいで商人たちも村に来ることはない。

とにかく嚙様に病気を治してもらわないとどうしようもないしな……ふう。とため息を吐くと、ラウジは書斎の火を落として寝室に向かった。

病（後書き）

皮肉屋のはずのラウジが何か真面目なおっちゃんになつていて不思議。

あれ？ 初期設定どこいった？？

はじまり？

あれから一週間が経つた。

初めて力を使つた次の日から勉強会といつづの拷問が始まった。
うん、あれは拷問だ。

おかげで力の使い方は大分上達した。

ついでに、身体の大きさも変えれるよつになつたので最近は常に大型犬くらいの大きさをしている。

あと、そもそもその正体がわかつた。『結界』という力で三本の尾の1つに宿っているらしい。無意識に展開しているらしいのだが、意識して使うと精度が上がるそのなので昼間は出来るだけ使うようにしている。使い勝手良さそうだしな。

そんなこんなで、今日は初めて村に行きます。ソフィアとラウジの二人とは森の出口で待ち合わせですよ。祠まで来てもらつてたら時間がかかるて仕方ないからな！

正直本当に治せるかなんて全くわからないけども頑張りつとは思つている。

まじめつ？（後書き）

今週はやたらと忙しくて更新遅い上にこんなけしか書いてません。
次でやつと村に行きます。気付いたらそれだけで13話も使ってた
よ。進み遅い……

お気に入り登録ありがとうございます！

週一くらいで更新していきたいと思っています！

ラウジとソフィアに先導されて村に入る。

入る前にこつそり結界を展開したので村人たちが数人を除いて皆、広場らしき所に集まっているのは確認済みである。

集まつてない人達が病人なのだろう。

「元の大きさに戻つて下さいませんか？」

これは元々予定していたことで、噛様は大きいと皆思つてゐるので大型犬サイズだと疑われる可能性がある。なので前の前に出るときは元の大きさで出ることにしていたのだ。

この一週間で感じることが出来るようになつた魔力を身体に流すと一瞬で元に戻る。

やはり元に戻ると解放感がある。身震いをすると、ソフィアが恍惚とした表情でこちらを見ていた。

えっと……………これはヤバい……………

一瞬、本氣で逃げるか考えていたらラウジがソフィアを叩いて正氣に戻してくれた。

助かつた……………

「ここを曲がると広場だ。

打ち合わせ通りまず俺が皆に貴方を紹介する。

その後、一番症状が軽い者の家に行つて力を使つてもうつ。成功したらそのまま家に行く。

それでいいな？」

打ち合わせ通りといふ事だな。

了解。と伝え、そのまま広場に突入する。

広場にはやはり村人全員が集まっていた。大人たちに隠れて見えにくいが隅の方には祠に来ていた子供がいたので挨拶のつもりで尻尾を振つておく。

……氣付かれなかつたみたいだけども。

村の人たちは私を遠巻きに見つめ、ヒソヒソと話していた。

「あれが……噉様……？」

「見て！尻尾が三本ある……！」

「舌は……？……見えないな」

「……おとぎ話の通りね……」

聞こえない様に話してゐつもりだらうが丸聞こえなので反応しないようにするのに苦労した。

パンツパンツ……！

と大きな音がして皆が静かになった。ラウジが手を打ち鳴らしたようだ。

「静かに！」

皆、もう知つてゐると思うが噉様が降臨された！この一週間、巫女と私の二人で噉様と話した結果、噉様に癒しの力を使って頂けることになった！！

ただ！前もつて話していた通り、噉様はこちらにこられて口が浅いため、すぐには治らないかもしけない！！

治らなくても噉様を恨んだりしないと約束できるか！？

「……できる……」

揃つた返事にラウジは満足そうに頷くと、私を一軒の家に誘導した。

村人の一人が慌てて「こちらに来ようとするがソフィアにやんわりと阻止されている。

元の大きさでは家には入れないので身体を縮めてから家に入り通された部屋には粗末なベッドに男が一人こちらを見ている。

「あんたが…幽様か？」

「ああ。」

「……そうか……」

それだけ言つと男は瞳を閉じて黙つてしまつた。

ラウジを見ると、「やつてくれ。」と言われたので今から貴方をくわえるので動かないで欲しいと伝えると、小さな頷きが返ってきた。動かなくなつたのは足だと聞いていたので、牙を立てないように気を付けながらくわえると、治る様にと念じながら舌先から魔力をゆつくりと流し込んでいく。

そのまま数分。

彼の身体に私の魔力が循環しているのを確認して、私は身体を離した。

「どうだ…？動くか？」

静かに問いかけると彼は瞳を開き、足を……動かした。
長い間使っていなかつた為に動きにくそうではあつたが、確かに足は動いた。

嬉しくなつて彼を見ると、呆然として「」の足を見つめている。
そして……

と、涙を流しながら絶叫した。

その後は病気の者たちの家を一軒一軒訪ね、癒していった。
一人治すたびに村が活気づいてゆく。

全員治ったのは夕方だった。

テヘジと二人で広場に戻ると、そこは宴会場と化していた。様々な形のそちらの家から持ち出してきたのだろう机には所狭しと料理が並べられ、男たちは祝杯を、女たちは次々と手料理を作り、空になつた皿を下げ、新しい料理を並べる。子供たちは歌いながら踊っている。

「やつてるな……幽様もじつぞ」

私は正直、魔力を沢山使って疲れていたので祠に帰つて休みたかったのだがそれが許されそうな雰囲気ではない。

「……」

「本當はあー、かとハ、いわゆつておこした！」

「ル・ル・ル」

お礼と供に次々と目の前に置かれる料理を食べていると子供たちが

近寄りてきたり

断りきれずに子供たちと一緒にになって踊りの輪に入る。くるくる回っていると楽しくなってきて何時までも踊っていたくな

つてくる。

くるくる

くるくる

ひらりつ

くるくる

子供たちが……大人たちが……皆、楽しそうに笑っている。
一旦休憩しようと踊りの輪から出ると、横にいた男に差し出された
飲み物を一気に飲み干した。

……あれ？？世界がまわ……？？？

あれから1ヶ月が経つた。

私は今も祠に帰つて住んでいる。

私が病を癒したあと、疫病はピタリと止んだ。村人たちは「嘔様のお陰です！」ととても喜んでいたが私は大したこととしたつもりはないので祟められるのに辟易し、祠に避難したらそのまま戻るのが面倒になつたのである。

一人きりだと寂しかつただろうが、毎日子供たちが食料を持つてきて、ついでに遊んでいくソフィアやラウジも一日に一度は顔を出してくれるのでそれほど寂しいとは思わないですんでいる。

で、今も私の前では子供たちがきやーきやー言いながら遊んでいる。ここに来るようになつたその日に子供たちから自己紹介をしてもらつた。

一番大きく、大人を連れてきたのがライ。ラウジの息子らしい。確かに紅い髪の色や目鼻立ちが似通つてゐる。

女の子の中で一番大きいのがリサで、金髪で緑の目をしたとても元気の良い子だ。時々元気が良すぎて……色々……うん、色々やらかしてくれる。

その次がドーン。物静かだが怒ると怖い。彼が怒ると地面が少し陥没したりするので驚いた。後でソフィアに聞いたのだがドーンは地の属性で精霊に好かれているせいだそんなことが起こるらしい。精霊って何だろうか？と思ったがソフィアに聞いたら恐怖のお勉強タイムが発生しそうだったので分かったフリをしておいた。

次がサイラス。リサの弟で姉に似ずしつかりしている。姉がしでかしたことの後始末をしていくうちにこうなった。とは本人の談である。

一番小さいのがリサ。内氣で人見知りの氣があるが優しい子である。

そうそう、私にも名前がついた。

“ダン”

という名前である。

嚙様と呼ばれるのが「そばゆかつたので名前で呼んで欲しいと頼んだら子供たちがつけてくれた。結構気に入っている。

子供たちと遊び、勉強しながら私は少しずつこちらの世界で生きるための手段を手に入れてゆく。

何かに急き立てられるようだ……

それが何なのか分からなかつた事を、後日、私はこうかいすることになる。

名前（後書き）

ほほ、キャラ紹介になってしましました。
といつあえずここで一章終わり。な感じです。

このあとは閑話を数話入れてから本編にとづく予定。

ご意見、感想などお待ちしています。誤字脱字の指摘してくださる
と喜びますーー！

彼女の気持ち

「ビーハー、ちやつたんだね、……」

彼女はセミロングの髪の毛を鬱陶し気にかきあげながら辺りを見渡した。

ある日の夕方。何時ものように散歩に行こうとおもつたら、そこには居なかつた。

リビングの端っこにある古毛布とよれよれになつたクッシュョンを重ねたそこから彼が動くことは歳を重ねるごとに少なくなつてきていた。

だから彼が居なかつたことにビックリして、丘所にいた母親に彼の行方を聞いたけれど知らないとのことだつた。

玄関には鍵がかかっていたし、クッシュョンにはほんの直前まで彼が居ただろう温もりを残していた。

それからは大変だつた。

近所中に聞いて回つて、迷い犬の届けを出した。

彼が居なくなつて泣き叫ぶ弟を両親と必死で慰めた。

逃げ出した様子は全くないになぜいないので?

お腹空かせてない?

怖くない?

泣いてない?

初めの数日は心配で心配で夜も眠れなかつた。

1ヶ月経つた今、一応普段の生活には戻つている。

お母さんとお父さんはもう彼は戻つてこないだらう。って言つている。

随分と弱つてきていたから自分が死ぬのが分かつて何処かにいったんじやないかつて。

私もそうかもしれない。とは思つ。

だけど、予定がない日はついつい彼を探してしまつ。

もし…もし、本当に死んでしまつたのだとしても。

その姿を私たちに見せたくなかつたのだとしても。

「めん、私は貴方を見つけたい。

見つけて、埋葬してあげたい。

いつか…貴方を思い出に出来る日までは探したつていいよね。

浮かんだ涙を「じーじー」と乱暴に脱ぐつて、私は散歩を続けることに

し
た。

彼女の気持ち（後書き）

と書ひわけで彼女（一番上の姉）の話でした。
やつと“私”が犬だつたと断言できました。
いやあ、何となく書く機会がなくて今まで延びたのです。

お気に入り登録ありがとうございます！

もう何話か閑話を書いたら本編に入りたい…とは思つてます。

遊び

甲高い絶叫が辺りに響きわたると、ドシンといつ音と共にダンの背中に衝撃が走った。

思わず避けそうになるのを押さえつけ、できるだけ衝撃を洞らすよう丸めていた背中を着地の瞬間に反らして再び丸めると落ちてきた者はぼーんと空に投げ出される。それを何回か繰り返して最終的には背中を滑り降りて終了。

原因はリサである。

さつきの絶叫も怖いからではなく喜んでいるのだからたちが悪い。

「ダメだよおお！わたしだもん！順番だもんつづ！」

それがおそれやあとで二争いをする子供たち。

どうでもいいが一人一回では無かつたのだろうか？もう一人一回はしている。

そもそも私は拒否したはすなのに何で「こんなことになってしまったのか？」と尋ねるのだろうか？

いや、分かつてゐる。

コーナの「かみせまおねがい」。（「うめうめさせた瞳つや」）に負けた私が悪いのだ。
悪いのだが……つ……

「いやッ ホー—————うーーー！」

物思いに沈んでいると再び背中に衝撃が走ったので慌てて先程と同じように何度も跳ねさせると背中を滑り降りさせた。

ちなみに私遊びは「これだけではない」。

初めは毛を触るだけだったのだが、慣れてくると色々してくれた。
ちなみに発案者はほとんどリサである。

- ・尾をみつあみこしみじしたり。
- ・魚釣りの棹にじょりとしたり。
- ・踏み台代わりに使つたり

あ…………思い出したら向だか泣けてきた。

尻に浮かびそうになつた涙をこいつぬぐつた私は遊びを続けた。

……この後、勉強の時間を忘れて遊び続けていた私たちはソフィア
にこいつてり怒られるのだがそれはまた別の話……

遊び（後書き）

体調崩してまして更新遅くなりました。

短いですが、リサがやらかしたことちよつとだけ書いてみました。

子供なのでこんなものです。

シッポ釣竿とか可哀想だけど水につけてピルピルしてゐる姿を妄想した
ら可愛しきて悶えた。

序章（前書き）

説明の回です。

「こちらの世界に呼び出されてから3年がたつた。

一年目は無我夢中で子供たちに混じつてこちらの世界について勉強した。

それ以外にもソフィアに魔術を教えてもらつたりした。
一年経つた頃には四代元素の魔術（火・風・水・土）の初級魔術ならば扱えるようになつていた。

二年目は一年目に習つたことの応用と、自分の力をより精密にコントロールできるようにするための訓練だつた。纖細かつ大胆に！が合言葉の訓練はとても大変だつたが、お陰で力の使い方は格段に上がり、上級魔術も使えるようになつた。

ちなみに私の癒しの力は魔術ではなく魔法に分類されるらしい。見分けかたとしては

訓練次第では誰でも扱うことができ、発動のためには呪文を唱えなければならないもの＝魔術

使う者が限られており、呪文を必要としない上に魔術よりも強力な効果を持つ力＝魔法

という風に分けられているそうだ。

そして魔法はものすごく珍しいので使える者は自分が魔法を使えることを隠すのが普通なんだそう。私が魔術を教えられたのもこのせいだということらしい。

国についても色々と学んだ。

まず、この大陸はセザール大陸と呼ばれている。

国は

人族が治めるユリティシア王国

同じく人族が治めるソール神国

竜族が治めるテネブラー魔国

の三国。

ユリティシア王国は二つの国に挟まれてはいるが国境間を巨大な山脈が走っているために戦争もなく気性が穏やかな者が多い。住んでいる種族も人族・獣族・神族・精霊族と多岐にわたる。

ソール神国は太陽神を唯一絶対の神様として信仰していて、人族しか入れない上に入るためにはとても複雑な手続きが必要なのだそうだ。

テネブラー魔国は魔力の基となる魔素が強い土地のため、神族や精霊族などの種族が多く住んでおり、獣族や人族は少ない。獣族は魔術が苦手なものが多いし、人族だと魔素が強すぎて体調を崩してしまうものが多い為、定住しにくいのだそうだ。

うん。こうやって復習してみると意外に覚えているものだな。

満足感とともに私は一本になつている尻尾をパタリと動かす。そうそう、3年のうちに私は人に化ける魔法を覚えていた。

耳と尻尾はまだ消せない為、見た目は獣族だ。

ちなみにこの姿に初めてなつたときのソフィアの反応は物凄かった。周りがドン引きしているのも意に介さず興奮しまくって、最後には何故か涙を浮かべていた。

正直、トラウマです。

人形になれるようになつた頃から、私の思考は限りなく人間くさいものになつたようだ。それと同時に元の世界の知識が私の中に何故か息づいている。

元・犬であった私は最初は混乱したが今はそれにも慣れた。考えるのわ放棄したとも言つ。便利だしな。

そんなこんなで私は今日も元気に魔術の修行に勤しむのだった。

序章（後書き）

明けましておめでとうございます。
やつといじ一章が始まります。
鈍亀更新ですが、よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8979x/>

嗜様

2012年1月5日22時46分発行